

新時期以降に見る武漢の
都市文学とその作品舞台

新時期文学とくに1980年代に地域を舞台にし、当該地域の文化や社会を描いた作品が多く登場した。上海や北京といった従来からある地域文学だけではなく、さまざまな地域の都市部を中心とした作品が発表され、80年代末から90年代前半までに、北京の“京味小説”、上海の“海味小説”以外に、“津味小説”“漢味小説”“蘇味小説”といった呼称が付けられた。(樊星『当代文学與地域文化』)

そのなかでも武漢を舞台とし、“漢味小説”や“江漢作家群”と呼ばれる作品群に着目してきた。“漢味”小説形成初期から武漢の各「通り」に焦点を当て、武漢内外に武漢の地域文化や社会生活を喧伝する作品群は武漢の文化や生活を外に知らしめる「ガイドブック」的な役割を担ってきた。それだけではなく、武漢三鎮とも呼称され、一つにまとめきれない武漢の文化的な特色を「雑」(池莉『武漢話題』。ここでは湖北料理を「雑」と称した)として東西南北の文化が混在していることこそが武漢の特色であるとし、従来武漢人自身が示すことのできなかった文化的特色を明確にした。

作品舞台の“現在”

2015年度、サバティカルで中国社会科学院において研究生活をおくる機会を得た際、これまでに確認できていなかった作品舞台を調査してきた。例えば、池莉『不談愛情』のヒロイン吉玲が抜け出したいと願ってやまなかった花楼街は、90年代の江漢路周辺の細い路地とも異なる空気感を有していた。その猥雑さは花楼街の持つ息づまった雰囲気を感じさせ、吉玲がなぜこの通りを蔑み、抜け出そうとしたのかを体感させてくれた。

映画化されたことで有名になった「生活秀」では、主人公来双揚が吉慶街で鴨頭を売っていたことから、鴨頭が名物となった。作品同様、吉慶街では夜ごと夜市が立つが、今は鴨頭を売る店はない。ただし鴨頭はいくつものチェーン店で扱われる武漢「名物」となっている。

このように花楼街など作品世界の雰囲気を残している通りもあるが、多くの通りが再開発により作品に描かれた「風景」を失ってしまった。池莉『冷也好熱也好活着就好』では、すでに失われつつある武漢の食文化や風物詩を描き、それらを「記憶」に留める作業が行われた。実際、江漢路を中心としたエリアでは80年代から90年代に描かれた作品世界は存在せず、小さな路地もなくなってしまった。吉玲が働いていた新華書店は姿を消し、四季美や蔡林記もチェーン店化してしまい、従来の場所には存在しない。つまりすでに「ガイドブック」としての役割は果たすことはできず、作品は一つの「記録」となってしまったのである。

また方が取り上げた曇華林や花園山は作品の雰囲気とは異なり、再開発による観光地化が進んでいる。その観光地化には小説そのものの宣伝に用いられており、“漢味小説”が担っていた武漢の都市文化や生活の紹介という性質が変化し新たな役割を付与されつつあることが見てとれる。



花楼街(池莉『不談愛情』)。写真撮影をしていて怒られた唯一の通り。



どんどん幅が狭くなり、肉や魚・蛙などを売る店がある。昔ながらの布団屋やイスラム教徒用の肉屋などが軒を連ねる。



吉慶街(池莉『生活秀』)



晴川橋(方方『出門尋死』)主人公の妹分が飛び降り自殺を図ろうとした橋。左手側に主人公が飛び降りようとした漢水橋(董宏猷兄弟が荷車押しをして小銭を稼いでいた橋)がある。



晴川閣と近くの公園(方方『出門尋死』)。主人公何漢晴と夫との思い出の地。このそばにある晴川飯店は方方の出世作『風景』に登場。



漢水と長江(武漢の作家の作品に多く登場も、水の境目が不明瞭に。90年代は明確に分かった)。奥が晴川橋、手前左が晴川閣そばの公園(方方『出門尋死』)。



観光地化が進む曇華林(方方『春天来到曇華林』)



花園山に建つ礼拝堂(方方『民の1911』)。曇華林のそばにある。観光客向けの絵葉書には方方『春天来到曇華林』が使用されている(右下)。



曇華林周辺を再開発し、観光地化が進められている。



漢口新市場(民衆樂園)(方方『水在時間之下』)。主人公たちが漢劇を演じた舞台。



楽園の近くには舞台用品を売る店(奥まったところにある)。武昌には漢劇の劇団も残る。



長堤街の入口(先は布の卸売市場が広がる)。ここで董宏猷が生まれた。



漢正街。呂運斌、漢正街風情録は80年代初期の武漢の地域文化を反映させた小説群。さまざまな食文化の発祥の地として描かれるが、現在ではさまざまな商品の「卸売市場」となっている。(漢正街は古くから埠頭に続く通りのため、さまざまな商品が集まる通り)



現在は整備も進み、漢正街風情録に描かれた情景は見られない。



池莉『冷也好熱也好活着就好』で描かれた武漢の名店も従来の場所には店舗を構えておらず、チェーン店化している。



「老武漢」と言えば熱乾麺。池莉・方方などの作品にも登場するが、蔡林記のものは以前は元々安い熱乾麺のなかでは値段もやや高め得上品な熱乾麺であった。上には桜えびが散らされ、現在のものとは味も麺も見た目も異なっていた。



豆皮大王の店舗は目にできなかったが、観光客向けに豆皮は販売されていた。多くが看板に「豆皮大王」の名を冠していた。



さまざまな作品に登場した江漢路は整備され、面影はなくなっている。作品舞台となった新華書店や四季美・蔡林記、埠頭を出たところに並ぶ熱乾麺などの屋台も姿を消してしまった。



武漢大学のキャンパスも広阜屯まで広がり、様相が変わった。真ん中にある壁が90年代初期の昔の武漢大学と町との境(上)。珞珈山路にある昔と変わらぬスーパー(下)。



瑜杉「女大学生宿舍」に描かれた瑞瓦の美しい民国期の建物(上は旧図書館)は変わらないが、使用できない状態になっているものもあった。ここにて池莉や方方など多くの作家が学んでいた。



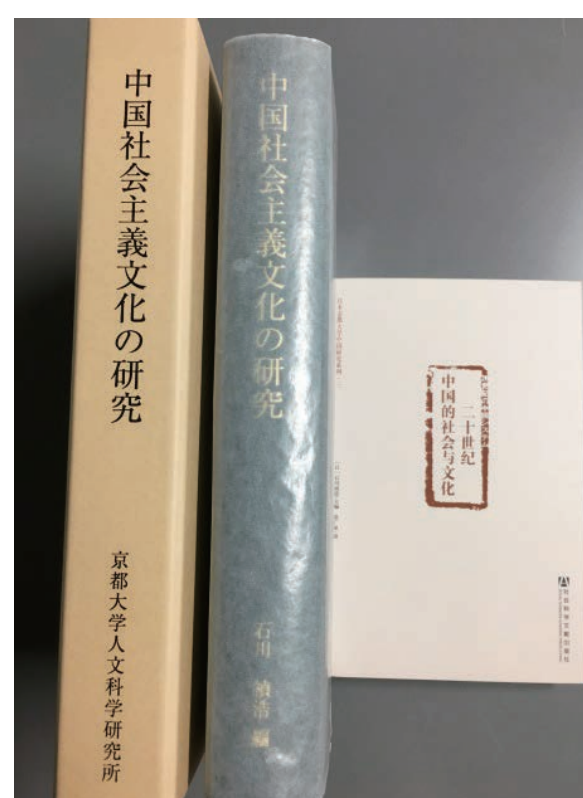
桜の季節の観光客や結婚写真を撮影する人々も多く、学生寮への出入りは厳格になった。

刊行物



「藍天の中国・香港・台湾 映画散策」
(天涼シリーズNO.8)
三恵社、2010

2004年5月以降、『天涼』(2007年3月終了)にほぼ毎月連載していた中国語圏の映画紹介をまとめた一冊。なかには香港の新進気鋭の演出家による舞台作品や映画の原作となった小説の分析なども含んでいる。



石川禎浩編
「中国社会主义文化の研究」
京都大学人文科学研究所、2010
石川禎浩主編、袁広泉訳
「二十世紀中国的社会與文化」
社会科学文献出版社、2013

「中国社会主义文化の研究」班による研究成果をまとめた報告書。「消費される文革期“手抄本”小説」が収録。中国語版は論文を修正・加筆した「文革時期“手抄本”小説の流伝概況」が収録されている。

研究テーマ

新時期以降の武漢の都市小説及び文革期の文学

最近の業績

- ・「方方の近作に見る中国社会」『佛教大学文学部論集』第101号、2017
- ・「日本中国語課本裡的《故郷》」『魯迅研究月刊』2015年第11期

専門分野

中国現代文学、言語文化学

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/about/teachers/detail/37/>

